
心の鍵

月島愛夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の鍵

【Nコード】

N7984C

【作者名】

月島愛夜

【あらすじ】

【自分が死んでも泣いてくれる人はいない。悲しんでくれる人はいない】あることがきっかけでも、何もかもを信じれなくなった少女。だか、運命の日はやってきた。《あなたに会えてよかった》もし、会えてなかったら？ううん…私達は繋がってる。『運命』だったんだから。絶対に…巡り会えただろうね…。少女の心の鍵を見つけたのは？そして少女は…。友達という名の宝を、あなたもどうぞ、見つけて下さいー

プロローグ

それから約三日、学校は休学。

心と体をゆつくりと休めなさいと担任に言われたが、休めるはずもない。

なんたつて本当の地獄はこの時からなのだから。

かなは何回か会ったことはあるが、あまり顔を覚えてない叔母の家へと預けられる事になった。

自分の荷物を適当に段ボールへつめこみ、迎えの車にかなは乗る。もう、何も感じない。辛いとか、嫌だとか何一つ思わなかった。勝手にすればいい。

かなは車のシートに背中をつけ、ため息をつく。

「着きました」

やけに丁寧な物言いの執事らしい男はゆつくりとドアを開ける。かなも慎重に車から下りた。

目の前には屋敷とも言えるほどの豪邸が立ちはだかっている。

「遅かったわね」

後ろを振り向くと、着物姿の叔母、幾代が待っていた。相変わらず無愛想な態度。

かなは薄い笑みを浮かべ、軽くお辞儀する。

「お世話になります」

「言つとくけど、あなたを育てる気はないからね。いくら姉さんの子供でも、そこまで気を使えませんか」

は？

何を言ってるのか？

「わかりましたね。食事は与えます。部屋も与えます。でもむやみに館を歩き回らないで。はっきり言って目障りなのよ……」

この人は…。

かなは心の中で確信した。この人は…私を家に入れたくない。だが
そうも出来ないから、家には入れておく。

かなはやつと気付いたのだ。

大変なことになってしまったのだと。

執事はかなが持っていた段ボールを持ち、部屋へと案内する。

案内されたのは、二階の屋根裏部屋。普通に歩くだけでも埃が宙
に浮く。

蜘蛛の巣は辺り一面にあるし、とにかく人が住めるような所ではな
いのだ。

つまり…『いない存在』なのだろう。

もう自分に味方をしてくれる人も居ない。

実感するのは悲しいが、事実なのだ。

かなはわりと明るい性格でクラスの中でも友達がたくさんいた。

だが、違うんだ。

自分の事を喋れる友達なんて、いない。こんな事で弱音を吐いてた
らきつと弱いつて思われてしまう。

それだけは避けたかった。

同情してくれなんて思わない。

でもただ黙って話を聞いてくれる人が一人でもいたら、きつとかな
はこの時に人を信じれなくなるなんて事にはならなかっただろう…。

「人は…醜いね」

こんな言葉を言わなくても良かったのに…。

プロローグ（後書き）

悪口などは控えて下さい m (_ _) m

第1話『死』

雨が降り続いた、うつつしい嵐の日だった。

まだ中学二年だった芦屋かなは、学校から帰ってきて言葉を失った。

回りには見知らぬ大人達。パトカー、救急車が細い路地に並んでいる。

「お嬢ちゃん、ここの家のお子さんですか？」

警官が険しい顔つきでかなに迫る。

なにやら嫌な予感が迫ってくる。

来ないで。かなはそう思った。

「…はい」

「お母様が通り魔に刺されました。落ち着いて下さいね。病院へ…
行きますか？」

今、なんて？

「刺された？」

あまり馴染みのない言葉。かなは聞き間違いかと耳を疑う。

「はい。病院へ行きますか？」

「い…行きます…す…どういうことですか？刺されたって誰が？！え…
なに、ちょっと待って下さい…」

「落ち着いて。車でお送りします。乗って下さい」

かなは言われた通りパトカーに乗り、急いで病院へと向かった。

ついたのは近くの大型の病院。

事実なのだとかなは再び認識し、頭の中が真っ白になった。

歩くことさえできないほど、ひどく混乱していた。なんせ、突然
なのだ。

いつも通りに学校へ行って、母は笑顔で見守っていたのに。
手を、振っていたのに…？

「大丈夫？さ、頑張つて」

婦人警官に支えられ、ようやくパトカーから下りたかなは、ふらつきながらもなんとか病院へと入っていく。

だが、かなが辿り着いた場所は『霊安室』。

「嘘だ…」

かなは扉を開ける。

ベッドに寝転び、顔に布をかけている人と医者らしき人がいた。

かなは恐る恐る布を取る。

「い…いや…母さん？ねえ…私を…一人にしないで言ったよね？父さん居なくても頑張ろうって言ったよ…ね？嘘だ…嘘だ…嘘だ！やはり、そこにいたのはかなの母だった。

かなは泣き叫び、母さんを叩く。周りにいた医者や警官は申し訳なさそうにかなを止める。

「ごめんね…」

婦人警官は涙ぐみながら一言だけそう言った。

「謝らないでよ…悪いと思うなら…あやまらないでよ…！」

かなは赤くなつた瞳に涙をためながら、必死に涙を止めようとするけれど、溢れてくるのは、涙…涙…涙。

「母さん…見えないや…もう母さんの姿さえ…何も見えないや…」ふふつと微笑んだかなのその姿は、医者と警官をひどく苦しめた。

心の中で、何回も何回もかなに謝った……。

「最悪な環境」

それから約三日、学校は休学。

心と体をゆつくりと休めなさいと担任に言われたが、休めるはずもない。

なんたつて本当の地獄はこの時からなのだから。

かなは何回か会ったことはあるが、あまり顔を覚えてない叔母の家へと預けられる事になった。

自分の荷物を適当に段ボールへつめこみ、迎えの車にかなは乗る。もう、何も感じない。辛いとか、嫌だとか何一つ思わなかった。勝手にすればいい。

かなは車のシートに背中をつけ、ため息をつく。

「着きました」

やけに丁寧な物言いの執事らしい男はゆつくりとドアを開ける。かなも慎重に車から下りた。

目の前には屋敷とも言えるほどの豪邸が立ちはだかっている。

「遅かったわね」

後ろを振り向くと、着物姿の叔母、幾代が待っていた。相変わらず無愛想な態度。

かなは薄い笑みを浮かべ、軽くお辞儀する。

「お世話になります」

「言つとくけど、あなたを育てる気はないからね。いくら姉さんの子供でも、そこまで気を使えませんか」

は？

何を言ってるのか？

「わかりましたね。食事は与えます。部屋も与えます。でもむやみに館を歩き回らないで。はっきり言って目障りなのよ……」

この人は…。

かなは心の中で確信した。この人は…私を家に入れたくない。だが
そうも出来ないから、家には入れておく。

かなはやつと気付いたのだ。

大変なことになってしまったのだと。

執事はかなが持っていた段ボールを持ち、部屋へと案内する。

案内されたのは、二階の屋根裏部屋。普通に歩くだけでも埃が宙
に浮く。

蜘蛛の巣は辺り一面にあるし、とにかく人が住めるような所ではな
いのだ。

つまり…『いない存在』なのだろう。

もう自分に味方をしてくれる人も居ない。

実感するのは悲しいが、事実なのだ。

かなはわりと明るい性格でクラスの中でも友達はたくさんいた。

だが、違うんだ。

自分の事を喋れる友達なんて、いない。こんな事で弱音を吐いてた
らきつと弱いつて思われてしまう。

それだけは避けたかった。

同情してくれなんて思わない。

でもただ黙って話を聞いてくれる人が一人でもいたら、きっとかな
はこの時に人を信じれなくなるなんて事にはならなかっただろう…。

「人は…醜いね」

こんな言葉を言わなくても良かったのに…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7984c/>

心の鍵

2010年10月9日03時36分発行